チビ太郎の冒險

永代美知代

チビ太郎は全く小さな、人形のやうな子供です。一寸法師よりも小さい、本當に拇指程の大きさしかありません。

『どうぞ子供を一人さづかりますやうに、どんな小さい子供でもかまひません。』

斯う父樣と母樣が神樣にお願ひして、やつと生れたのがチビ太郎でした。ですが餘りと云へば小さ過ぎるので、最初父樣は落膽してしまひました。併しチビ太郎は段々恰悧になりました。體こそ小さいけれど、丁度桃から產れた桃太郎さんのやうに、案外力があつて、氣性の確乎した好い兒です。

ですから父樣は最う大悅びで、チビ太郎チビ太郎と可愛がつて、何處へ行くにもポケットへ入れて連れて歩きました。

或日、父樣は持山の見廻りに出掛けて行きました。そしてチビ太郎も一緒に連れられました。ポケットの中から四周の景色を覗いてチビ太郎は大喜びです。

『父樣、僕散歩がしたくなつちやつた、おろして頂戴』

『では此處いらで一休みしようかな』

父樣は靑草の上に腰を下して煙草を吹し初めました。其間にチビ太郎は其處らを面白がつて驅け歩きました。

『餘り遠くへ行なさんなよ』

『大丈夫、僕父樣の傍ばかり廻つてるんです』

チビ太郎は、自分の脊程もある土筆をいぢつて見たり、黃や紫に咲いた菫や都草の花に見とれたり、恍惚して居りますと、突然犬か何かゞ驅け出して來たと思ふ間もなく、ぷいと突き飛ばされてしまひました。

それから何時間かの間、チビ太郎は氣絕して居りました。氣がついた時には四周はもう眞暗でした。

『父樣！　父樣！』

聲を限りに呼んで見ましたけれ共、一向何の答もあり

ません。遙かの大空に星が光つてゐるばかり。

と誰か此方へ歩いて來るらしい人の靴音がします。チビ太郎は屹度父樣だと思ひました。父樣が心配して探しにいらつしたのだと思ひました、で今一度大きな聲で呼びました。

『父樣、父樣！』

『オヤ』

一寸と立ち止つてから靴音は段々此方へ近づきました。

『僕此處に居ます』

『誰だ貴樣は？』

さう云ふ聲は父樣ではなく而も不賴漢のやうな風體の男二人でした。アッと思つて身を隱さうとしましたが、チビ太郎は不賴漢の手に拾はれてしまひました。

『ウフ、面白い、此奴これで本物の人間だから面白い、今に又金儲けの種になるよ、拾つて行かう』

『さうだ、それに此奴は小さいから何處へでも隱して行ける、仕事の邪魔にならないから可い』

不賴漢はこんな事を云ひ合つてゐましたが彼方の方に灯影の見える、村端れのやうな處まで來ると、急に立止つて、囁くやうに云ひました。

『まだ少々時刻が早すぎる、此處らで一眠りして行つた方がよからうぜ』

『さうだ泥棒は兎角眞夜中に限るよ』

不賴漢の內懷に入れられたチビ太郎は呆れてしまひました。どうせ善人だらうとは思ひませんでしたけれど、まさか泥棒のやうな惡人とも思ひませんでしたチビ太郎はじつと耳を澄して二人の話を聞きました。

二人は今晚彼方の村の、一番立派な白壁の土藏のある家へ、泥棒に入るつもりで、すつかり手順をきめて、此

處で夜の更けるのを待ち合さうと云ふのでした。

『如何かしてあの白壁の家へ知らせてあげたいものだ』

チビ太郎は一人でこんな事を考へました。それから如何したら不頼漢の手からのがれられるか、第一にそれを考へなければならぬと思ひました。

併し幸福な事には、不頼漢共は二人共居睡をし初めました。チビ太郎が自分達の會話を聞いたに相違ないとは思ひましたけれども、併しほんの拇指程の、人形のやうな小ぼけな奴に、何が出來るものかと、みくびつてしまつて、チビ太郎には氣をゆるし切つてゐるのでした。

チビ太郎は暫らくの間じつと息をこらして、不頼漢二人の樣子を窺ひました。二人共鼾をかいてだらしなく口を開いたまま、よく眠込んで居りました。

チビ太郎はそつと内懐を這ひ出して、靜かに靜かに膝を傳つて地面へ下り立ちました。そして今一度二人の寢息を窺ひました。

『大丈夫、今の内に！』

チビ太郎は一生懸命、彼方の村の灯影を見あてに馳け出しました。若しかして眼を覺ました不頼漢共が氣がついて跡を追つかけて來るやうな事はあるまいか、チビ太郎は幾度となく後ろを見返り見返り、ヒタ急ぎに駈け通しました。

やつとの事で眼指す白壁の家まで來ました。ですけれども何分にも夜更けの事で、門のしまりが嚴重にされてありました。チビ太郎は裏門へ廻はつて見たり、又た引き返して表門の前で考へ込んだり、入り兼ねて居りました。

其の内に時間は段々經ちますし、さうかうして居るうち、先刻の不頼漢にやつて來られては堪りません、折角

大急ぎで先廻はりして來た事も何も無駄になつてしまひます。チビ太郎の骨折が無駄になる位な事は可いとしても、それでは何にも知らない白壁の家の人達が氣の毒です。

『御免下さい、御免下さい、ドンドン、ドンドン』

併しチビ太郎が勢一杯の聲を張り擧げて呼んだところで、家の奥深く寢込んでゐる人達の耳には入りません、力限り門の戸を叩いたせいで、可哀相にチビ太郎の手は傷きました。

『あゝあ、折角此處まで來たのに！』

ふと氣がついたのは裏の臺所口の、流しから下水へ通じる穴でした。汚いの何のと、そんな贅澤を云つてゐる場合ではありません、チビ太郎は早速其處から家の中へ這ひ込みました。そして家の人達を呼び覺しました。

『それは大變！』

それから大騒ぎになりました。と丁度其時時刻はよしと塀を乘り越えようとしてゐた不頼漢は驚ろきました。

『變だぜ、變だぜ、家中起きてゐるやうだ』

『逃げ出せ〳〵！』

『ヤァ泥棒が逃げてく〳〵！』

家の者は大悅びではやしました、そしてチビ太郎のお蔭だと皆なでお禮を云ひました。

『あなたは本當に偉い方です、お蔭で助かりました、一體何處の坊ちやんですか』

チビ太郎は父樣と持山を見廻つてゐる途中からの出來事を話されました。そして白壁の家の人に送られて無事に父樣のお家へ歸る事が出來ました